

甲虫ニュース

No. 130
July 2000

COLEOPTERISTS' NEWS

日本産ハナノミ科ハナノミ族概説 5¹⁾

高 桑 正 敏

ニセコオビハナノミ *Glipa* (*Macroglipa*) sp. 2*Glipa* sp.: TAKAKUWA, 1976, Elytra, Tokyo, 3: 16, pl. 3, fig. 3.

体長 7.5-8 mm. 斑紋パターンは次種に似るが、小楯板はあざやかな白色毛で被われ、鞘翅の紋は灰白色微毛から成り、中央前方の環状紋は下方で強くジグザグ状、前胸背の黒紋は3分割され、雄交尾器は太短い。雌は雄よりも鞘翅の淡色紋が発達するが、後方帯は会合部近くで切れる傾向がある。

石垣島からのみ知られる。現在までに検することができた標本はごくわずかにすぎない。

分布: 石垣島。

コオビハナノミ *Glipa* (*Macroglipa*) *fasciata* KÔNO*Glipa fasciata* KÔNO, 1928, Trans. Sapporo nat. Hist. Soc., 10: 32, fig. 2B.

体長 7-10 mm. 小楯板は暗色毛で被われていて見た目にも黒く、前胸背の黒紋は雄では互いに連結する傾向が強いが、とくに雌の場合はしばしば3分割される。鞘翅の紋は金~灰黄色微毛から成り、前胸背の淡色微毛とはほぼ同色、端紋を生じることなく、雌はより淡色で発達する傾向が強い。

日本では中国・四国地方から琉球列島にかけて局地的に記録されている。下甌島や奄美大島など島嶼では個体数も多く得られているが、本州では山口県(初宿彦氏は中国地方の別の県での本種と思われる個体を検したことがあるという)、四国では基準産地である愛媛県、九州では宮崎

県のそれぞれ1例が知られているにすぎない。また、高倉(1981, 北九州の昆虫, 28: 95-99)は宮崎県北郷村から本属の不明種を記録するとともに、「*G. masatakai*, *G. oshimana*, *G. fasciata* などのグループのもので、最後のものによく似るが未記載種ではないかと思われる」と述べていて、その正体が気にかかる。沖縄島の個体群は下甌島や屋久島、奄美大島のそれらとは鞘翅の斑紋の形がやや異なり、またとくに雌で鞘翅の淡色紋が発達する傾向が多少とも認められるものの変化が大きく、奄美大島以北産とほとんど差のない個体も現れる。中国ではFAN & YANG (1993)により各地から記録されているが、それに示されている雄交尾器の図は明らかに本種とは異なっている。

幼虫形態については林(1980; 1981)により詳しく図示されている。幼虫は広葉樹の枯れ木の中に穿孔するという。

分布: 本州(西部)、四国[基準産地]、九州、下甌島、屋久島、奄美大島、沖縄島; 台湾、中国(中・南部)。

マキハラオビハナノミ *Glipa* (*Macroglipa*) sp. 3

体長 8 mm. 前種に似るが、小楯板は灰白色毛で被われ、前胸背の黒紋はやや不明瞭、後角は角張り、鞘翅の淡色紋は細く、それを構成する微毛はややまばら、基部紋は発達せず、会合部から肩方向へと向かう帯は1本で側部に届かず、また不明瞭ながらも端紋を現す。尾節板はかなり短く、端は太く切断状、基部側面以外は黒毛で被われる。後脛節の

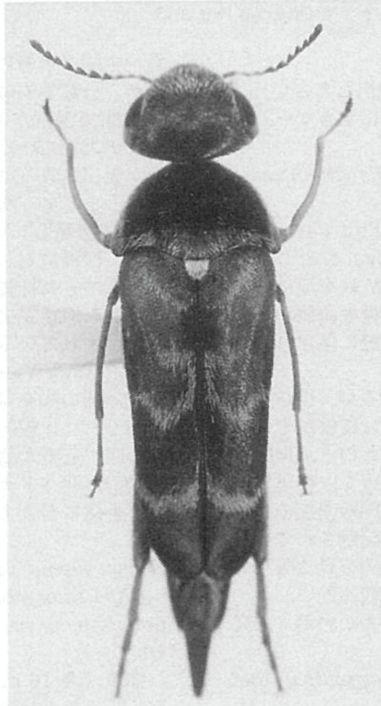


図1. サトウオビハナノミ *Glipa* (*Macroglipa*) *satoi yanma* TAKAKUWA, ♂.

¹⁾ TAKAKUWA, M., Notes on the tribe Mordellini (Coleoptera, Mordellidae) of Japan, 5.

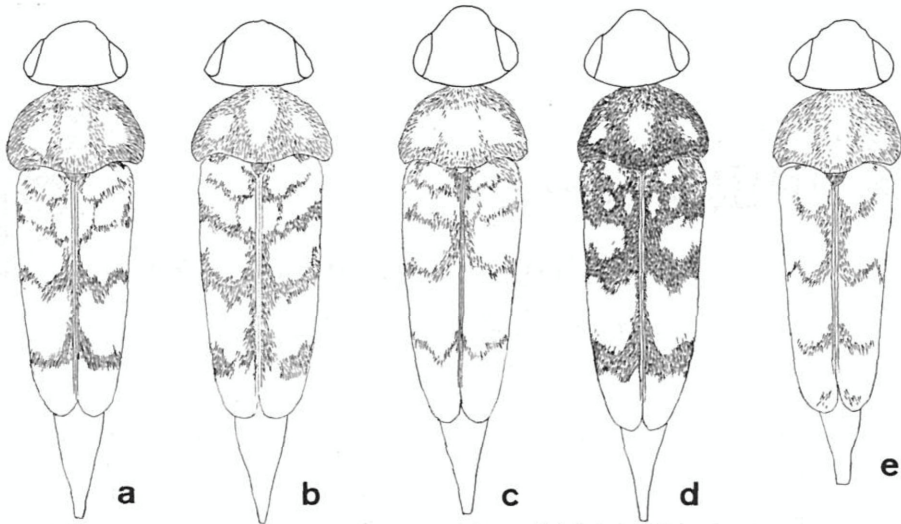


図2. コオビハナノミグループの前胸背と鞘翅の淡色毛から形成される斑紋。a: ニセコオビハナノミ *Glipa* (*Macroglipta*) sp. 2, ♂, b: ditto, ♀, c: コオビハナノミ *Glipa* (*M.*) *fasciata* Kôno, ♂, d: ditto, ♀ (沖縄島産, 斑紋の発達したタイプ), e: マキハラオビハナノミ *Glipa* (*M.*) sp. 3, ♂.

端刺は暗褐色。

西表島船浦の材(アコウ)から脱出したという1雄(楨原 寛氏採集)を検しているにすぎない。

分布: 西表島。

ウエノオビハナノミ *Glipa* (*Macroglipta*) *uenoi* TAKAKUWA

Glipa uenoi TAKAKUWA, 1986, Ent. Pap. pres. KUROSAWA, Tokyo, pp. 259, 261, figs. 4, 8, 11.

体長 7.2-8.4 mm. 鞘翅は中央のW紋を境にふつうかなり明瞭に後半が黒, 前半も小楯板両側から会合部一帯が黒で, 褐色部とはやや明瞭に境される。雌は背面の淡色紋がほぼ灰白色。

奄美大島と沖縄島からのみ知られるが, 得られている個体数はかなり少ない。台湾には斑紋がやや異なるものの明らかに同種と思われるものと, 斑紋パターンが本種によく似るがより小型で短く, 交尾器の形状を違える未記載種を産する。中国も南部の各地から FAN & YANG (1993) によって記録されているが, それに示されている雄交尾器の図を見る限りでは, サトウオビハナノミのそれに比較的近い。

分布: 奄美大島 [基準産地], 沖縄島; 台湾 (未発表), 中国 (南部)。

サトウオビハナノミ *Glipa* (*Macroglipta*) *satoi* NAKANE & NOMURA

Glipa satoi NAKANE & NOMURA, 1950, Trans. Kansai ent. Soc., 15: 1, fig. 1.

前種に似るが, 体はより太く, 鞘翅の褐色部と黒色部はより不明瞭に境され, 基部紋の形を違える(概説3を参照)ほか, 後方帯は中央のW紋と通常はつながらない(ときに会合部沿いに連結する)。また, 尾節板はより長い。

かなり分類の難しい種群に含まれ, インドシナ半

島や中国, 台湾にいくつかの近似種が存在するようだが, 分類学的に整理されていない。かつては次種との間で混乱があり, 本種の記載直後に NAKANE (1950) は ERMISCH 博士の指摘に従い, 「細かな相違点が見出されるけれどもあらゆる重要な特徴が一致する」として, 次種のシノニムに扱ってしまった。また, 次種とピックオビハナノミとの混乱(後述)から, 次種に対してサトウオビハナノミの和名が使用されてきた経緯がある。ただし, それが最初に使用された原色昆虫大図鑑(野村, 1963)に次種として図示されているのは本種である。中国南部からの記録(FAN & YANG, 1993)は, それに示されている雄交尾器の図を見る限りでは, タイワンオビハナノミのそれに比較的近い。

分布: 奄美大島, 沖縄島; 台湾 [基準産地], 中国 (南部), 北ベトナム (未発表)。

2亜種に分かれ, 日本には次の1亜種が分布する。

Subsp. *yanma* TAKAKUWA

Glipa satoi yanma TAKAKUWA, 1986, Ent. Pap. pres. KUROSAWA, Tokyo, pp. 259, 260, figs. 2, 3, 7, 10.

体長 7.3-10 mm. 基準亜種との形質的な差は少なく, それとは前胸背の黒紋がより大きく, 鞘翅の淡色紋の形がいくらか異なり, 尾節板は短く, 端部に急に細まるなどの差がある程度にすぎない。

奄美大島と沖縄島からのみ知られ, 一般には得がたいものの1つである。リュウキュウマツの生育する場所に多く見られる傾向があるので, その樹種となんらかの関わりがあるように思われる。亜種名は基準産地の奄美大島山間(やんま)に基づく。

分布: 奄美大島 [基準産地], 沖縄島。

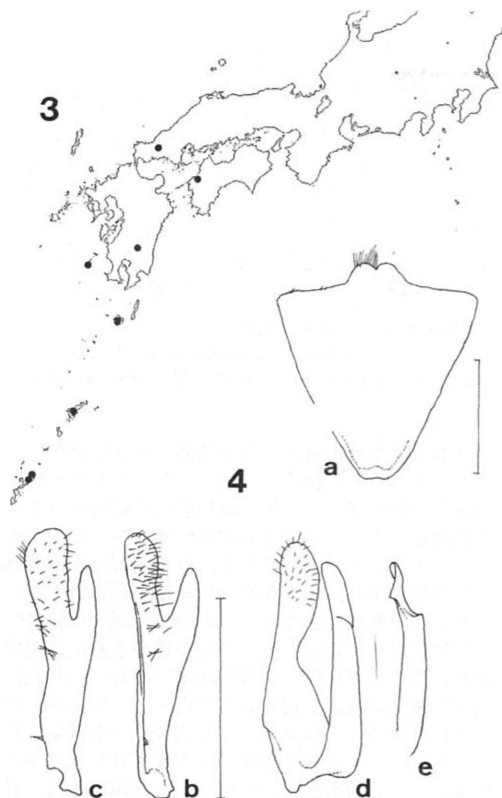


図3. コオビハナノミ *Glipa (Macroglipa) fasciata* Kôno の日本における分布。

図4. コオビハナノミ *Glipa (Macroglipa) fasciata* Kôno, ♂ (奄美大島産)。a: 第8腹板, b: 交尾器左側葉片 (内面), c: ditto (右側面), d: 交尾器右側葉片 (内面), e: ditto (付属枝, 左側面)。Scales: 1 mm.

台湾オビハナノミ *Glipa (Macroglipa) formosana* Pic

Glipa formosana Pic, 1909, Échange, 27: 190.

和名については、前種と次種に関連して、高桑 (1984) により次のような理由で大幅に変更された経緯があり、それ以前のものについては注意を必要とする。まず、前種のところで述べたように、野村 (1963) は本種に対し、サトウオビハナノミの名を当てた。種名が *formosana* なので、本来なら台湾オビハナノミの名を冠したいところであったと思われるが、その名はすでに次種に対して与えられていたため、やむなく当時本種のシノニムとされていた *satoi* にちなんだのであろう。しかし、*satoi* が独立種と判明したことから、*formosana* に対してサトウオビハナノミの名を継承することは将来的に問題があるし、本来その名は前種に対して与えられるべきである (野村, 1963 に図示されていたのも前種であった)。一方、*formosana* に対しては台湾オビハナノミという名を冠することができれば、もっ

とも混乱がない。しかし、その名は次種 *pici* との混乱から、次種に対して当てられてきたので、このさい将来の混乱を防ぐために、次種にはビクオビハナノミ、本種 *formosana* には台湾オビハナノミ、前種の *satoi* にはサトウオビハナノミという名の使用を提唱した。

体長 8-10.4 mm. 鞘翅はほぼ全体が褐色～暗褐色、小楯板両側から会合部一帯に暗色部はほとんど認められず、後方の暗褐色部は基方の褐色部とほとんど境されることなく後方に次第に暗化する。鞘翅の後方帯は中央の W 紋と、会合部沿いに多少とも不明瞭ながらも細くつながる。尾節板は前種よりも細い。

日本では琉球列島中央部だけに分布し、また台湾にも分布するという点は、本グループ内の他の種と共通である。日本では前種よりもさらに得難いように思われる。台湾産とは雄交尾器を含め、形態的な差はほとんど見あたらない。水戸野 (1932) は台湾において本種の幼虫がリュウキュウマツの幹に穿孔し、その害が著しいと報告するとともに、「頗る敏速なる活動をなし、飛翔に際しては蜂の如き音響を發す」という興味深い生態的記述を加えている。ただし、体長が 6 mm にすぎない点と全形図を見る限りでは、他の種類を指している可能性が強い。中国南部と海南島からの記録 (FAN & YANG, 1993) は、それに示されている雄交尾器の図を見る限りでは、系統の異なった別の種である。

なお、非常に困ったことに、パリの国立自然史博物館に収蔵されている本種のタイプ標本の 1 つ (Taihorin, Formosa, 1/IV というラベルが付されている) は、私の見た限りでは ERMISCH (1940) が再記載した種類 (明らかに現在本種の名を当てている種と思われる) とは異なり、ビクオビハナノミのグループのものである。ERMISCH (1940) から判断すれば、本種とされた Pic のタイプ標本列 (次種を参照) は 2 頭なので、問題の解決には残る 1 頭のタイプ、それにドイツにある次種のタイプ標本列を見る必要があるかもしれない。

分布: 奄美大島, 沖縄島; 台湾 [基準産地], 中国 (南部) ?, 海南島?.

ビクオビハナノミ *Glipa (Macroglipa) pici* ERMISCH

Glipa pici ERMISCH, 1940, Ent. Bl., 36: 162, 163, fig. 1.

体長 6.4-10.5 mm. 色彩は前種に似るが、本亜属のグルーピングの際に記したように、系統はかなり異なったものと思われる。小楯板は銀白色毛で密に被われてよく目立つが、鞘翅の淡色紋はそれを構成する微毛がまばらなためしばしば基半で不明瞭 (とくに雄は微毛がやや黄色味を帯びるためその傾向が著しい)、中央の W 紋とその直前に 1 対の斜条紋を現し、後方帯は会合部沿いに細く伸びて通常は W 紋に連結し、しばしば端紋を現すものの、鞘翅の紋は全体に個体差が大きい。

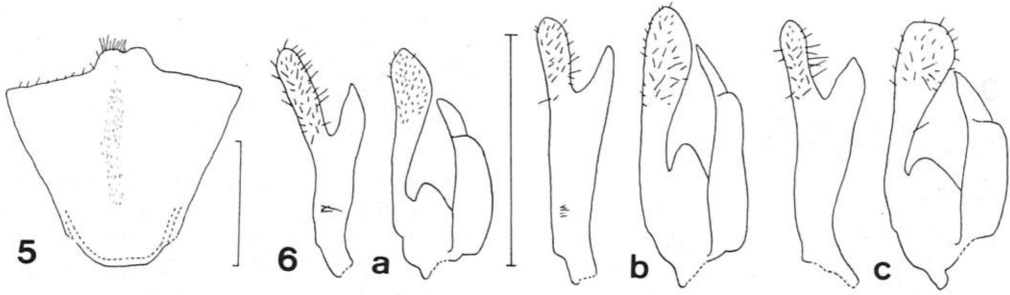


図5. ウエノオビハナノミ *Glipa (Macroglipta) uenoi* TAKAKUWA の雄第8腹板. Scale: 1 mm.
 図6. タイワンオビハナノミグループの雄交尾器側葉片. a: ウエノオビハナノミ *Glipa (Macroglipta) uenoi* TAKAKUWA, b: サトウオビハナノミ *Glipa (M.) satoi yanma* TAKAKUWA, c: タイワンオビハナノミ *Glipa (M.) formosana* Pic. (TAKAKUWA, 1986) Scale: 1 mm.

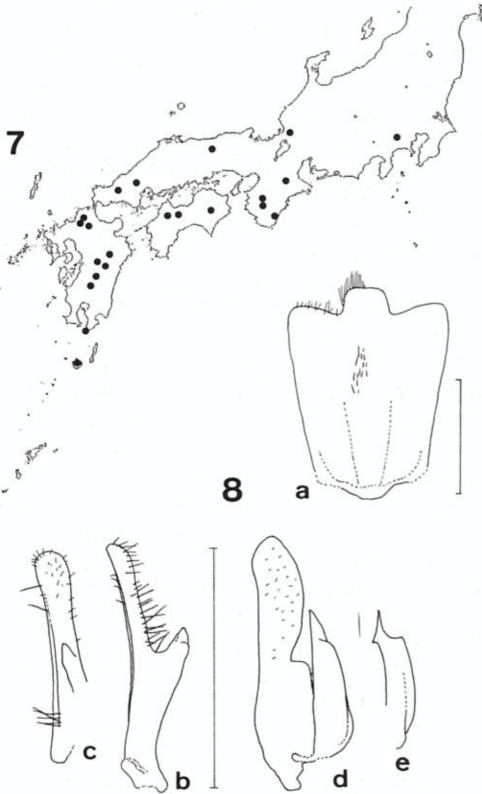


図7. ピックオビハナノミ *Glipa (Macroglipta) pici* ERMISCH の日本における分布.
 図8. ピックオビハナノミ *Glipa (Macroglipta) pici* ERMISCH, ♂ (宮崎県産). a: 第8腹板, b: 交尾器左側葉片 (内面), c: ditto (右側面), d: 交尾器右側葉片 (内面), e: ditto (付属枝, 左側面). Scales: 1 mm.

日本では本州中央部から屋久島にかけて分布し、おもしろいことに台湾に分布しながらもトカラ列島以南で記録がない。本州では和歌山県新宮市のような低地のシイ・カシ帯でも記録があるが、むしろ山地のブナ帯に多いようである。分布東限は日本海側で福井県今庄町、太平洋岸では紀伊半島から大きく飛んで東京都高尾山となっている。四国では徳島県と高知県から記録があり、また筆者の手許には愛媛県産の標本(割石峠, 18. VI. 1967, M. IGA)がある。九州では北部などで比較的多く得られているが、南端の佐多岬でも記録され、また宮崎県でも採集されている(1♂, 五ヶ瀬村鞍岡, 24. VII. 1974, 入江平吉採集; 1♀, 延岡市祝子, 20-21. VII. 1986, 下村 徹採集; いずれも筆者蔵)。台湾産と比較すると、鞘翅の色彩がより明るく、雄第8腹板の形をやや違えるなどの軽微な差が認められるものの、雄交尾器の形状は非常によく似ていて、同種とすることに疑いがない。中国南部と海南島からの記録(FAN & YANG, 1993)は、それに示されている雄交尾器の図を見る限りでは、明らかに別の種である。前種のところで述べたように、かつては本種に対して台湾オビハナノミの和名を使用してきたので注意されたい。

ERMISCH (1940) は前種のタイプ標本列(syntypes)を検討し、その中に2種が含まれていることを認め、一方の種を本種とした。しかし、台湾には本グループの種が少なくとも3種は分布しているようであり、ERMISCHの原記載とよく一致するのはむしろ日本から採集されていない種の方である。ERMISCHのタイプ標本の検討を待たねばならないにせよ、日本産に当てべき種名は将来変更される可能性がある。

分布: 本州(東京都以西)、四国、九州、屋久島; 台湾[基準産地]、中国(中・南部)、海南島。
 (神奈川県立生命の星・地球博物館)

日本産セスジダルマガムシ属概説¹⁾

吉富博之・松井英司・佐藤光一・疋田直之

セスジダルマガムシ属 *Ochthebius* LEACH の種は主に溪流に生息し、岩の水際などに見られる。幼虫も成虫もおそらく珪藻類を食しているものと思われる。春季から夏季には成虫から幼虫、蛹までの各ステージが同時に見られ、越冬は成虫にて行われる。終令幼虫は岩の水しぶきのかからないところに泥や砂粒などで繭のようなものを作り、その中で蛹化する。日本産種は JÄCH (1998) により再検討され、海岸性の種を含めて 8 種が分布することが判明している。

本報では、JÄCH (1998) に基づき日本産種を紹介するとともに、既知の記録を整理し、またこれまでに判明している断片的な生態的知見についても触れたい。

採集方法

(1) 溪流に生息する種

溪流では、頭が少し水から出ているような石(岩)

を探す。そして 1 つ 1 つ岩の表面を丁寧に回ると見つかる。特に水際の湿って水しぶきがかかるようなところに多い。環境としては低山帯から山地を流れる石の多い中・小河川の溪流(ちょうどアユ釣りの人が多いあたり)が良いが、種によって異なる。何度か採集するうちにコツがつかめ、インスピレーションで、ここにはいそだ、ということが分かってくるようになる。セスジダルマガムシは溪流脇の水たまりのアオミドロ内や滝のように流れ落ちる場所のコケ内から多数採れることが多い。セスジダルマガムシは底が砂地になっている湧き水を掬って採集されることもある。変わった水環境で採集したり変わった採集法を行うと、未知の種や珍しい種が採集される可能性が高い。

(2) 海岸性種

海岸性種の採集は難しい。一般に浅いタイドプールでソウ類が多く見られるような場所に生息するという。また、岸壁を流れ落ちる淡水内からニッポン

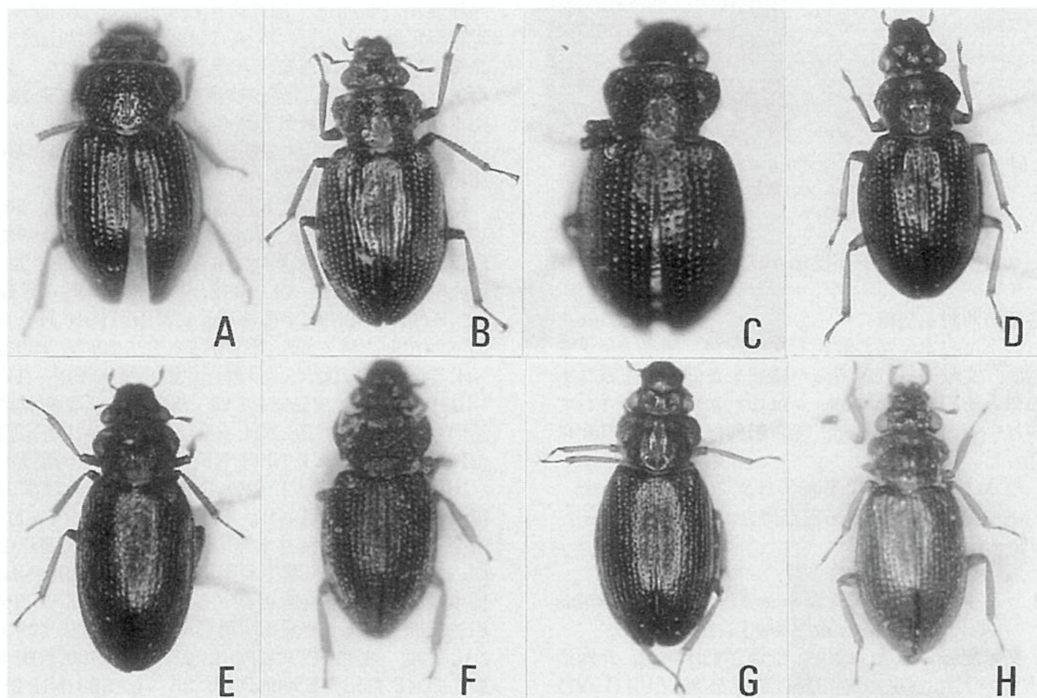


図 1. 日本産セスジダルマガムシ属。A: エゾセスジダルマガムシ (新称)。B: ハセガワダルマガムシ。C: ホンシュウセスジダルマガムシ (新称)。D: ナカネダルマガムシ。E: シオダマリセスジダルマガムシ (新称)。F: ニッポンセスジダルマガムシ (新称)。G: セスジダルマガムシ。H: コセスジダルマガムシ。

¹⁾ YOSHITOMI, H., E. MATSUI, K. SATO & N. HIKIDA, Notes on the genus *Ochthebius* of Japan.

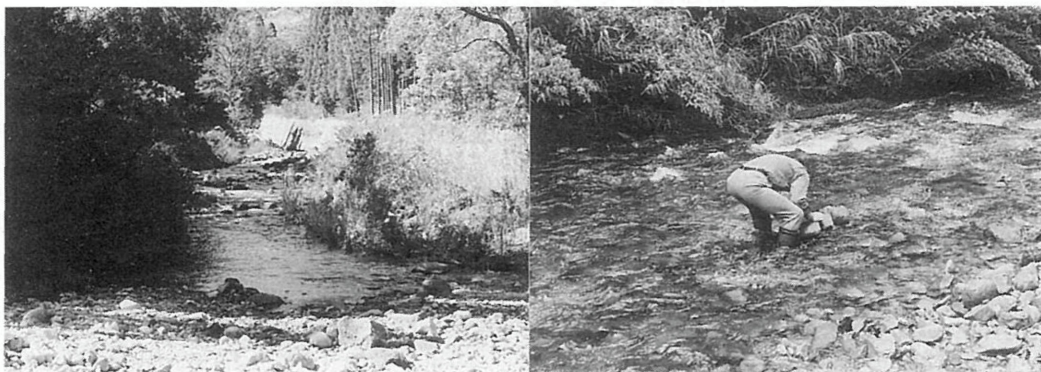


図2. 渓流性セスジダルマガムシの生息環境。左: ハセガワダルマガムシとナカネダルマガムシが同所的に採集された大分県庄内町阿蘇野川。右: セスジダルマガムシの採集風景。



図3. 海岸性セスジダルマガムシの生息環境。ニッポンセスジダルマガムシ(新称)の基準産地である静岡県伊豆半島須崎。

セスジダルマガムシが採集されている。

各種の解説と記録

以下に日本産種の解説と文献記録, 標本データを示す。文献記録は著者らが確認した同定の正確なもののみを記し, 標本データはこれまでに記録されていないもののみ示した。種の配列は Jäch (1998) に従った。

標本データ内の採集者名は次のように略した。EM—松井英司, HY—吉富博之, KS—佐藤光一, NH—疋田直之。

1. エゾセスジダルマガムシ(新称) *Ochthebius (Asiobates) hokkaidensis* Jäch

文献記録 Jäch (1998): 北海道知床林道, 北海道サロベツ, 北海道江別市野幌森林公園; 山川 (1997): 北海道斜里町岩尾別

標本データ 北海道: 1頭, 黒松内町朱太川, 26. VIII. 1993, EM.

生態 北海道より記録されているが, 少ない。

分布 北海道。

その他 国内では名古屋女子大学に holotype と paratype が保管されている。

2. ハセガワダルマガムシ *Ochthebius*

(?*Enicocerus*) *hasegawai* NAKANE & MATSUI

文献記録 MATSUI (1986): 東京都小仏峠; 大桃 (1995)—ナカネダルマと誤同一: 北海道札幌市南区篠舞川, 北海道生田原町生田原川; 吉富 (1997): 愛知県足助町東大見; Jäch (1998): 北海道定山渓, 北海道幌満, 北海道知床五湖, 北海道ベンケル, 北海道ベシュッペ川, 北海道旭町岩尾内, 北海道札幌, 栃木県高久甲, 長野県志賀高原, 岐阜県徳山ダム, 三重県美杉村平倉, 大分県庄内町平連; 大桃 (1999): 北海道遠軽町湧別川。

標本データ 北海道: 1頭, 黒松内町朱太川, 26. VIII. 1993, EM; 1頭, 大滝村美笛, 24. VIII. 1993, EM; 1頭, 湧別町湧別川, 19. VIII. 1993, EM; 1頭, 羅臼町滝田川, 25. VI. 1992, 安倍 浩採集。青森県: 7頭, 十和田町宇樽部川, 1. VIII. 1998, HY; 9頭, 西津軽郡鯉ヶ沢町深谷町細ヶ平, 22. V. 1997, NH。岩手県: 7頭, 二戸郡一戸町小繋田子川, 17. VIII. 1998, NH。福島県: 1頭, 双葉郡浪江町権現堂請戸川, 22. VI. 1998, NH; 2頭, 双葉郡浪江町室原信田請戸川, 23. VI. 1998, NH; 5頭, 原町市深野木戸内橋新田川, 22. VI. 1998, NH; 7頭, 南会津郡田島町長野下川原加藤谷川, 12. VI. 1999, NH; 12頭, 南会津郡田島町東荒井水無川, 13. VI. 1998, NH; 2頭, 南会津郡只見町蒲生蒲生川, 19. VIII. 1998, NH。栃木県: 2頭, 塩谷町風見(鬼怒川), 28. X. 1996, KS; 3頭, 黒磯市越堀昭明橋那珂川, 23. VII. 1990, NH; 2頭, 黒磯市板室那珂川, 23. VII. 1990, NH; 1頭, 那珂郡那須町筒地那珂川, 25. VI. 1988, NH; 25頭, 鹿沼市引田大芦川, 5. VII. 1999, KS。茨城県: 1頭, 久慈郡大子町袋田滝川, 4. V. 2000, NH。埼玉県: 1頭, 日高市巾着田, 12. IV. 1999, HY; 1頭, 嵐山町遠山, 3. V. 1997, 豊田浩二採集。静岡県: 1頭, 三島市柿田川, 29. IV. 1999, HY; 7頭, 佐久間

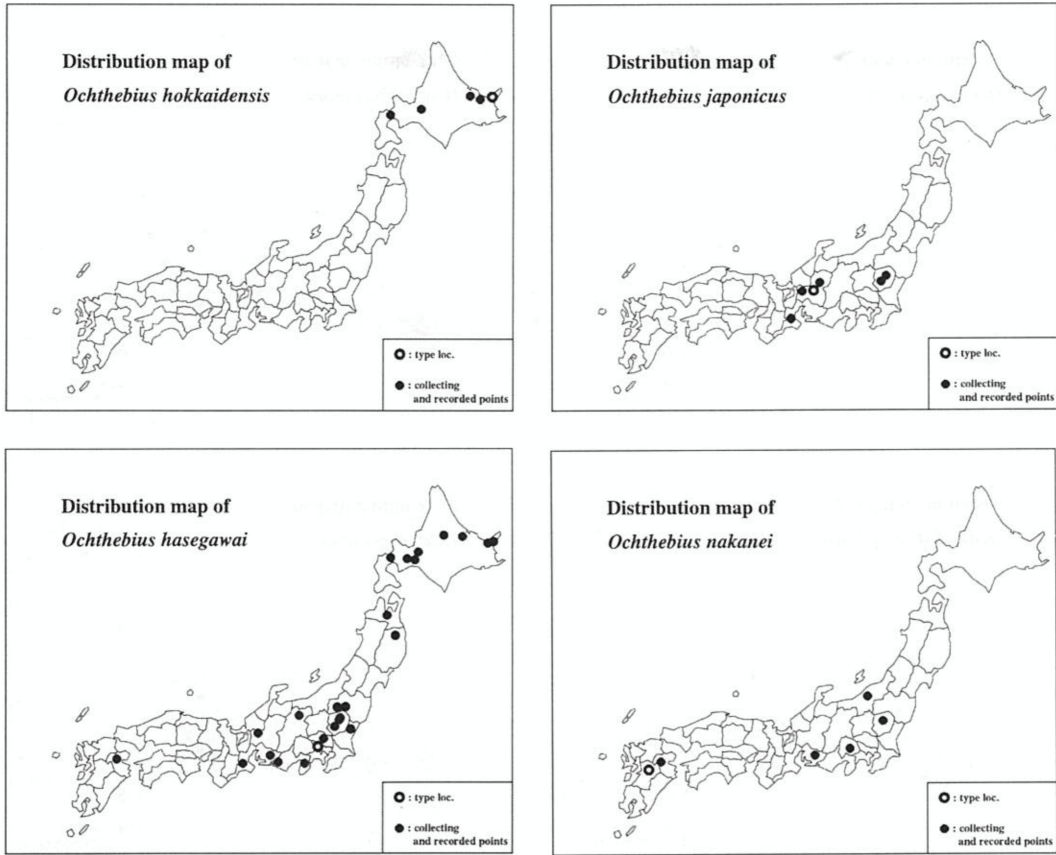


図4. 分布図(その1). 左上: エソセスジダルマガムシ(新称), 左下: ハセガワダルマガムシ, 右上: ホンシュウセスジダルマガムシ(新称), 右下: ナカネダルマガムシ.

町, 3. III. 1999, HY. 愛知県: 多数, 北設楽郡稲武町野入野入川, 1. VIII. 1998, NH. 大分県: 17 頭, 庄内町阿蘇野川, 3. XI. 1997, HY; 195 頭 (+ 幼虫 58 頭), 庄内町平連, 30~31. V. 1998, EM.

生態 これまでの記録は比較的少ないが, 各地で最も普通の種であり, セスジダルマとして間違っ
て記録されてきた可能性が高い. セスジダルマとは検
索表に示すとおり容易に区別することができる. 平
地から低山地の溪流や小川, 大河川の中流域など
に多い. 岩の割れ目などに身をひそめた形で成虫越冬
し, 冬でも気温の高い日中には岩の上を這い回っ
ている. 幼虫は春季から秋季に成虫と同時に採集され
る.

分布 北海道, 本州, 九州.

その他 中根猛彦コレクションに holotype が保
管されている.

3. ホンシュウセスジダルマガムシ (新称)

Ochthebius (?*Enicocerus*) *japonicus* JÄCH

文献記録 JÄCH (1998): 栃木県西方町本城 (思

川), 岐阜県 Wara 川, 岐阜県 Oppara, 岐阜県赤穂,
岐阜県西村ダム, 三重県美杉村平倉.

標本データ 栃木県: 351 頭, 鹿沼市引田大芦川,
5. VII. 1999, KS.

生態 本州より記録され, 前種と同様の環境で採
集されるが少ない. 三重県美杉村平倉などではハセ
ガワダルマと一緒に採集された.

分布 本州.

その他 国内では名古屋女子大学, 国立科学博物
館, 栃木県立博物館, 松井英司個人コレクション,
吉富博之個人コレクションに paratype が保管され
ている.

4. ナカネダルマガムシ *Ochthebius*
(?*Enicocerus*) *nakanei* MATSUI

文献記録 MATSUI (1986): 熊本県菊池溪谷; 佐
藤・大桃 (1995): 栃木県; 吉富 (1997): 愛知県足助
町一ヶ瀬 (足助川); JÄCH (1998) 新潟県蓮華温泉.

標本データ 栃木県: 3 頭, 塩谷町上寺島尚仁沢,
27. VI. 1998, KS; 17 頭, 同所, 9. VII. 1998, KS. 山

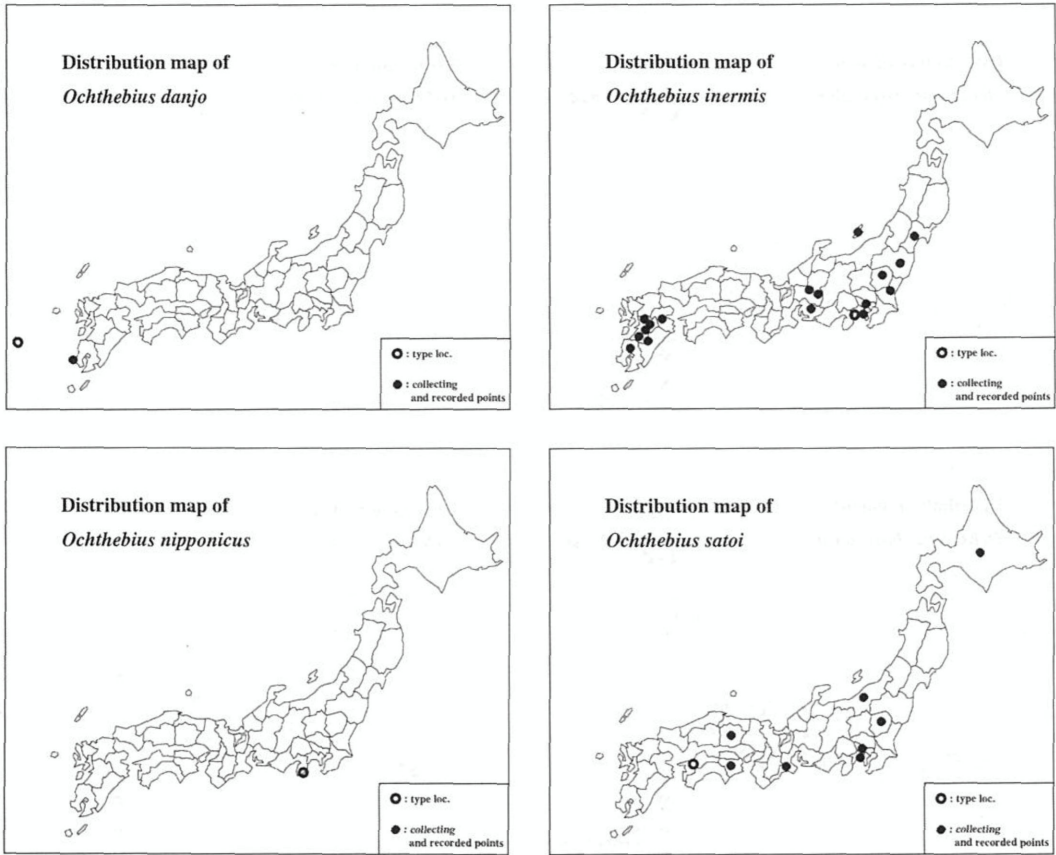


図5. 分布図 (その2). 左上: シオダマリセスジダルマガムシ (新称). 左下: ニッポンセスジダルマガムシ (新称). 右上: セスジダルマガムシ. 右下: コセスジダルマガムシ.

梨県: 1頭, 丹波山村三条谷, 5. V. 1996, 丸山宗利採集. 大分県: 2頭, 庄内町阿蘇野川, 3. XI. 1997, HY.

生態 本州と九州の山地帯に生息し, 比較的閉鎖的な環境を流れる溪流などから採集されるが個体数は少ない. 大分県庄内町阿蘇野川では, ハセガワダルマに混じって採集されたが, 基本的に両種の生息環境は異なっており, 同時に採集されることは少ない.

分布 本州, 九州.

その他 中根猛彦コレクションに holotype が保管されている.

JÄCH (1998) は, 本州産と九州産 (holotype のみ) を調べたところ外部形態に若干の相違が見られるとしている. 今回, 新たに九州産の2個体が発見されたことから比較してみたところ, 若干の差異は見られるものの, 本州産個体群の個体差の範囲内に内包されると判断された.

5. シオダマリセスジダルマガムシ (新称)
Ochthebius (s.str.) *danjo* NAKANE

文献記録 中根 (1990): 男女群島中ノ島; MATSUI & DELGADO (1997): 鹿児島県枕崎市.

生態 海岸の潮上帯のロックプールに生息する海浜性の種で, 九州西部の海岸部より知られている. 本種が生息するロックプールの塩分濃度は 0~1.8% であった.

分布 九州.

その他 中根猛彦コレクションに holotype が保管されている. 幼虫の形態は, DELGADO & MATSUI (2000) が詳しく記載している. 日本産の本属で幼虫形態が記載されている種は現在のところ本種のみである.

6. ニッポンセスジダルマガムシ (新称)
Ochthebius (s.str.) *nipponicus* JÄCH

文献記録 JÄCH (1998): 静岡県伊豆半島 (須崎).

生態 伊豆半島の海岸部から採集された2個体が知られるのみで, 生態的な知見はまったくない.

基準標本の採集者である国立科学博物館の友国博士によると、詳しくは覚えていないが、海岸の崖壁を伝う淡水の細流から採集したのではないかとのことであった。

分布 本州。

その他 名古屋女子大学に holotype が保管されている。吉富は 1998 年と 1999 年にかけて冬季から春季に数回にわたり伊豆半島の海岸部の調査を行い本種の発見に努めたが、生息を確認することはできなかった。基準産地の須崎では観光地化に伴い沿岸部の遊歩道と護岸が整備されており、本種の生息は絶望と考えられた (図 3)。しかし、温暖地の沿岸部で生息地が再発見される可能性は高いと考えられる。

7. セスジダルマガムシ *Ochthebius* (s.str.) *inermis* SHARP

文献記録 SHARP (1884): 神奈川県箱根町宮の下; 神谷 (1939): 熊本県長陽村栃木温泉; 佐藤 (1961): 新潟県; 佐藤 (1968): 岐阜県飛騨川流域; 平野 (1981): 神奈川県小田原; 佐藤・穂積 (1984): 愛知県; MATSUI (1986): 鹿児島県大口市曾木の滝; JÄCH (1992): 熊本県相良村; 松井 (1989): 熊本県相良村川村駅下・藤田, 熊本県五木村池の鶴, 熊本県多良木町中島; 松井 (1993): 熊本県菊池市千畳河原, 熊本県矢部町通潤橋・野尻; JÄCH (1998): 宮城県, 栃木県, 東京都, 佐渡島, 岐阜県, 熊本県。

標本データ 福島県: 6 頭, 福島市町庭坂矢細工, 25. VII. 1990, NH. 岐阜県: 高根村濁河温泉, 9. IX. 1997, HY. 熊本県: 69 頭, 椎持, 9. XI. 1996, EM; 225 頭, 同所, 15. III. 1998, EM; 49 頭, 菊池市千畳河原, 23. IX. 1997, EM; 3 頭, 菊池市龍門, 4. V. 1994, EM; 11 頭, 矢部町譲原, 16. X. 1994, EM; 11 頭, 相良町川村駅下, 18. VI. 1995, EM. 大分県: 32 頭, 九重町吉部, 24. V. 1997, EM. 鹿児島県: 3 頭, 曾木の滝, 27. IV. 1997, EM.

生態 本種は、本属中、最も普通の種の 1 つで、各地のファウナリストに記録が見られるが、他種の標本が混ざっている可能性があり、これまでの記録は見直す必要がある。平野から山地の溪流に生息し、生息数は多いが産地は局地的である。

分布 本州, 佐渡島, 九州。

8. コセスジダルマガムシ *Ochthebius* (s.str.) *satoi* NAKANE

文献記録 NAKANE (1965): 愛媛県重信川; 馬場 (1972): 新潟県; 山治 (1989): 岡山県; JÄCH (1991): 北海道, 徳島県, 三重県, 新潟県, 東京都; 佐藤・大桃 (1995): 栃木県。

生態 北海道~四国で記録されており、国外ではモンゴルから極東ロシア, 中国, 台湾に分布する。溪流より採集されるが、個体数は少ない。日本産の他種と異なり、水中から採集されることが多いようだ。

分布 北海道, 本州, 四国。

その他 中根猛彦コレクションに holotype が保管されている。

日本産セスジダルマガムシ属 *Ochthebius* LEACH の検索表

- 1a 上唇の前縁は明瞭に凹み、頭楯の前角に小さな刺毛を有する。小顎鬚の先端節はかなり短い。前胸背板の基部は縁取られない。……………2
- 1b 上唇の前縁は凹まない、もしくは凹む場合は頭楯の前角に小さな刺毛を欠く。小顎鬚の先端節は長い。前胸背板の基部は縁取られる。……………4
- 2a 前胸背はやや長く (W/L は約 1.2)、側方の透明部は明瞭でない。体は緑色光沢をもつ黒色。脚は黄色。……………ナカネダルマガムシ
- 2b 前胸背は横長 (W/L は約 1.4-1.5)、側方の透明部は明瞭。体は銅色光沢を有する黒褐色で緑色光沢は弱い。脚は黄色がかった黒色。………3
- 3a 体長は約 2.2~2.4 mm。前胸背の点刻はまばらで不規則、中央部の縦溝は明瞭。体色は銅色味が強い。……………ハセガワダルマガムシ
- 3b 体長は約 1.7~2.0 mm。前胸背の点刻は比較的密で規則的、中央部の縦溝は不明瞭。体色は銅色味が弱く、前種に比べ光沢が強い。……………ホンシュウセスジダルマガムシ (新称)
- 4a 前胸背の側縁は基部が深くえぐられ、前方にむかって顕著に広がる。体は比較的平ら。……………ニッポンセスジダルマガムシ (新称)
- 4b 前胸背の側縁は基部約 1/3 が浅く凹み、その前方は緩やかに広がる。体は厚みがある。………5
- 5a 前胸背の中央縦溝の側方に点刻の集合による凹みを欠く。……………エゾセスジダルマガムシ (新称)
- 5b 前胸背の中央縦溝の側方に点刻の集合による凹みを有する。……………6
- 6a 上唇の前縁はゆるやかに弧を描き、中央部は凹まない。体長 1.8~2.1 mm。……………セスジダルマガムシ
- 6b 上唇の前縁は中央部が凹む……………7
- 7a 体長 1.45~1.85 mm。……………コセスジダルマガムシ
- 7b 体長 2.15~2.40 mm。……………シオダマリセスジダルマガムシ (新称)

問題点と今後の課題

本報ではこれまでの記録の見直しおよび各種の分布状況の把握を行ったが、標本の確認を行えなかったり怪しい記録については言及していない。誤同定の可能性が高い記録については今後の再同定を期待する。また、これまで記録のない都道府県での分布調査も期待される。ハセガワダルマとナカネダルマが四国地方で未記録になっているのはおそらく調査されていないだけと考えられるが、どうであろうか。

新種および新記録種の発見については、琉球列島を含め期待されるが、大幅には増加しないと考える

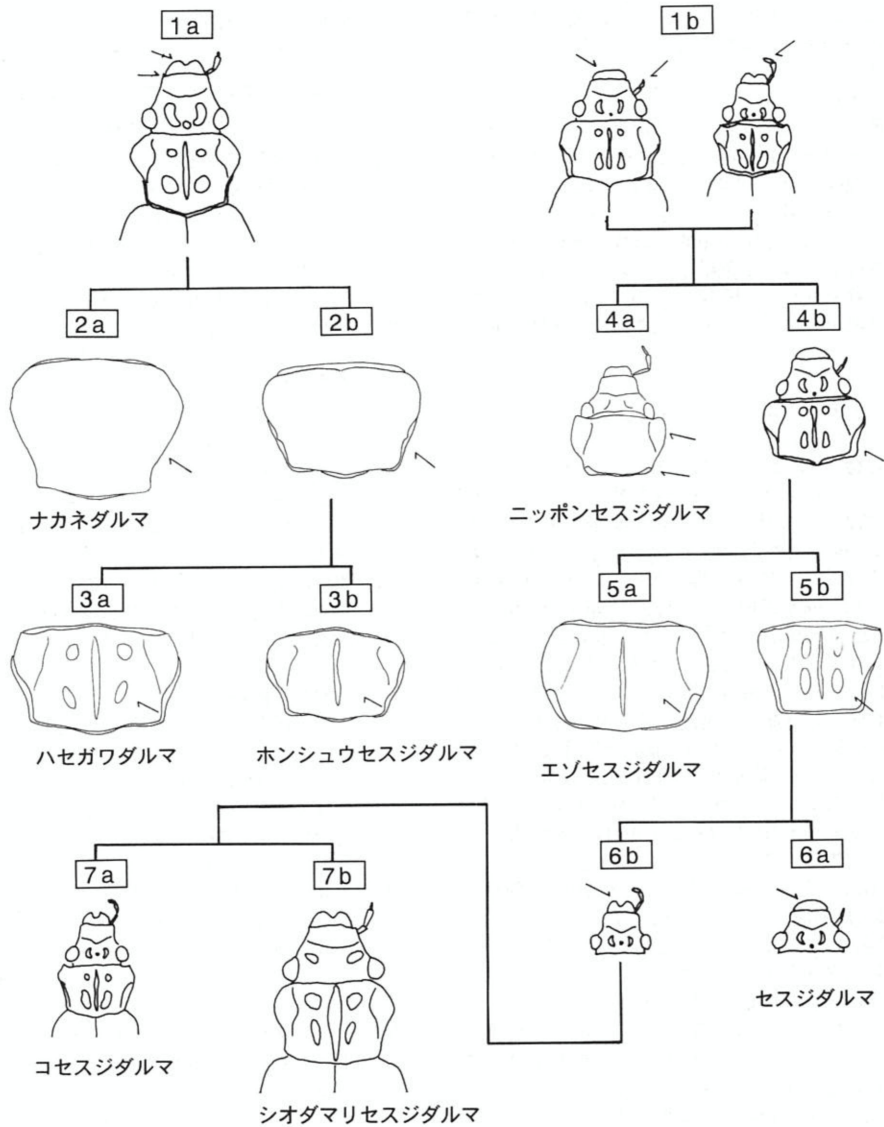


図6. 日本産セシダルマガムシ属の絵解き検索 (図内の番号は本文中の検索表に対応する)。

れる。幼虫期についての研究は、DELGADO & MATSUI (2000) のみで今のところ他にない。幼虫は成虫と同様にして多数採集されるため資料の収集も容易であることから、生態面も含め研究されることが期待される。

謝 辞

本報をまとめるにあたり、日頃より御指導頂いている名古屋女子大学の佐藤正孝博士とウィーン自然史博物館の Dr. M. A. JÄCH に厚くお礼申し上げる。特に佐藤博士からは比較のために貴重な基準標本も

借用させていただいた。国立科学博物館の友国雅章博士にはニッポンセシダルマガムシの採集状況を教えていただき、茨城県の大桃定洋博士、埼玉県嵐山町の豊田浩二氏、北海道大学昆虫体系学研究室の丸山宗利氏には貴重な標本データの発表を御承諾頂いた。東京都北区の江本健一氏には図1の写真を撮影していただいた。心よりお礼申し上げます。

参考文献

馬場金太郎, 1972. 新潟県北部, 胎内川流域の鞘翅目. 飯豊山塊, 胎内溪谷の生物, 195-240.

- DELGADO, J. A. & MATSUI, E. 2000. Description of the larval stages of *Ochthebius* (s.str.) *danjo* NAKANE (Coleoptera: Hydraenidae) from Japan. *Ent. Sci.*, **3**: 125-130.
- 平野幸彦, 1981. 神奈川県甲虫. 神奈川県昆虫調査報告書, 233-372.
- JÄCH, M. A. 1992. Revision of the Palearctic species of the genus *Ochthebius* LEACH X. the *punctatus* species group (Hydraenidae: Coleoptera). *Bull. Ann. Soc. r. belge Ent.*, (128): 167-195.
- JÄCH, M. A. 1998. Hydraenidae: II. The Taiwanese and Japanese species of *Ochthebius* LEACH (Coleoptera). In JÄCH, M. A. & Ji, L. (eds.): *Water Beetles of China*, II, 173-193. Wien: Zoologisch-Botanische Gesellschaft in Österreich and Wiener Coleopterologenverein. 371 pp.
- 神谷一男, 1939. 日本産水棲甲虫類. [I] 牙虫科 (1). 日本の甲蟲, **3**(1): 26-31.
- MATSUI, E., 1986. Notes on some new Hydrophiloidea from Japan (Coleoptera). *Special Bull. Jap. Soc. Col.*, (2): 81-90.
- 松井英司, 1989. 熊本県球磨・人吉地方で採集した水生昆虫類. 熊本昆虫同好会報, **34**(3): 1-9.
- 松井英司, 1993. 熊本県産水生甲虫類分布資料 (2). SA-TSUMA, (108): 41-50.
- MATSUI, E. & DELGADO, J. A., 1997. A new species of the genus *Ochthebius* from Japan (Coleoptera, Hydraenidae). *Esakia, Fukuoka*, (37): 71-76.
- NAKANE, T., 1965. New or little-known Coleoptera from Japan and its adjacent regions. 23. *Fragm. coleopt.*, (13-15): 51-59.
- 中根猛彦, 1990. 日本の雑甲虫覚え書 6. 北九州の昆虫, **37**: 62-68.
- 大桃定洋, 1995. 北海道で採集した 5 種の水生甲虫. 月刊むし, (298): 16-17.

- 大桃定洋, 1999. 北海道で採集した水生甲虫 5 種. 月刊むし, (341): 44-45.
- 大桃定洋・久保田正秀・沼田 稔・市毛勝義・疋田直之, 1993. コウチュウ目, 茨城県の昆虫, 88-196. 水戸市立博物館.
- 佐藤正孝, 1961. 馬場博士採集の新潟県産水棲甲虫類 [I]. Niigata-ken no Kontyu, (6): 6-15.
- 佐藤正孝, 1968. 飛騨川流域の昆虫類に関する覚え書 I. 名古屋女子大学紀要, (14): 115-123.
- 佐藤正孝・穂積俊文, 1984. 甲虫類. 愛知の動物, 183-204. 愛知県郷土資料研究会.
- 佐藤光一・大桃定洋, 1995. 栃木県産甲虫類分布資料 (4). インセクト, (46): 14-23.
- SHARP, D., 1884. The water-beetles of Japan. *Trans. ent. Soc. London*, **1884**: 439-464.
- 山地 治, 1989. 岡山県より採集した甲虫類の記録. すずむし, (123): 14-19.
- 山川雄大, 1997. 北海道見記録のガムシ類 3 種の記録. 月刊むし, (323): 40.
- 吉富博之, 1997. 愛知県で採集されたダルマガムシ 2 種. 甲虫ニュース, (119): 6.
- (吉富博之: 愛媛大学農学部昆虫学研究室)
(松井英司: 熊本県立荒尾高等学校)
(佐藤光一: 栃木県宇都宮市)
(疋田直之: 水戸葵陵高等学校)

【追記】

本校正終了後、以下の論文が発表されたことを知ったので追記する。

豊田浩二, 2000. 埼玉県のダルマガムシ類について. 寄せ蛾記, (94): 2835-2837.

埼玉県におけるハセガワダルマとナカネダルマの記録が出ており、ハセガワダルマのすばらしい生態写真も載せられている。

○メンノキダルマガムシ (新称) の採集記録

メンノキダルマガムシ (新称) *Hydraena chifengi* JÄCH et DIAZ は愛知県北設楽郡稲武町面ノ木峠を基準産地として最近に記載された種である。基準産地ではタイプ標本以外にも複数個体採集されており、生息個体数は少なくはないようであるが、他産地からの追加採集記録はまだない。溪流沿いの落葉を一枚一枚丁寧にみていくという採集法では効率も悪く、微小な種であるため採集するにもコツがいるようで、このことも他の生息地の発見を困難にしている可能性が高い。筆者は山梨県で本種を採集しているので報告する。

1 頭, 山梨県道志町菰釣山, 6. XII. 1998, 吉富博之の採集。

水深 2 cm 程度の細流内に沈んでいる落葉を一枚一枚裏返し、その裏面に付いていた個体を採集した。

本種はシコクダルマガムシ *H. notsui* SATÔ とヨ

シトミダルマガムシ (新称) *Hydraena yoshitomii* JÄCH et DIAZ に酷似するとされるが (JÄCH & DIAZ, 1999), パラタイプ標本を含め比較検鏡したところ、前種とは上唇前縁の切り込み具合、後種とは前胸背板の形と点刻具合により区別することができた。

なお、本種の和名については、良好な自然環境が残され、昆虫類の採集地としても有名な面ノ木峠が基準産地であることから上記を使用したい。

末筆ながら、採集に同行して下さった野中 勝氏と大塩一郎氏にお礼申し上げる。

引用文献

- JÄCH, M. A. and J. A. DIAZ, 1999. Description of two new species of *Hydraena* KUGELANN from Honshu, Japan, with a check list of the Japanese species. *Jpn. J. syst. Ent.*, **5**: 337-340.

(愛媛大学農学部昆虫学研究室, 吉富博之)

○静岡県産ハナノミ科甲虫の記録

静岡県下で以下のハナノミを得ているので報告する。報告に際し、ヤクハナノミの同定やいろいろと助言をして頂いた高桑正敏博士に深謝する。

1. ヤクハナノミ

Yakuhananomia yakui (KÔNO)

7♂♂8♀♀, 本川根町長島, 23-31. VII. 1999.

採集された個体は、斑紋が発達した個体も見られたが、ほとんど黒化傾向の強いイワキヤクハナノミタイプであった。長島ダムの工事により伐採された材木の集積土場脇にあった、切り株から伸びた新芽の葉上に飛来してきては静止する個体を得た。

2. オオオビハナノミ

Glipa shirozui NAKANE

1♀, 本川根町長島, 26. VII. 1999.

前出の土場に飛来した個体を得た。材種は、シイ・カシ・ネムノキ・ヤマザクラ・ケヤキ等が主体であった。

3. アヤオビハナノミ

Glipa ohgushii (CHÛJÔ)

1♀, 金谷町志登呂, 1. VII. 1997.

大井川河川敷の竹藪の中に倒れていたヤナギの倒木上を徘徊中の個体を得た。このヤナギは直径が60 cmほどで、下側半分が白色のコウヤクタケの一種に覆われており、多数のコキノコゴミムシとナガニジゴミムシダマシ類が集まっていた。

4. オオキボシハナノミ

Hoshihananomia auromaculata (CHÛJÔ)

16♂♂16♀♀, 静岡市井川, 21-29. VI. 1996; 3♀♀, 本川根町長島, 19. VII-12. VIII. 1999.

井川では、植栽されてから3~4年のヒノキ植林地内に切り残された、樹種不明の直径1 mほどの立ち枯れ木から羽化脱出した個体が、付近のヒノキの葉上に静止しているところを得た。長島では、前述の土場材に飛来した個体を得た。

5. キノコホシハナノミ

Curtimorda maculosa (NAEZEN)

9頭, 静岡市二軒小屋, 26. VIII. 1979; 1頭, 同上, 7. VIII. 1994.

土場に残された、古い樹皮のない倒木に飛来してきた個体を得た。

6. アカカタハナノミ

Mordellaria aurata (KÔNO)

1頭, 水窪町門桁山, 10. VII. 1988; 1頭, 水窪町五丁坂頭山, 14. VII. 1989; 1頭, 同上, 15. VII. 1990; 1頭, 水窪町常光寺山, 9. VI. 1990; 3頭, 同上, 27. VI. 1991; 1頭, 水窪町チタア山, 22. VII. 1991; 1頭, 静岡市上千枚沢, 17. VI. 1993; 1頭, 静岡市二軒小屋, 10. VIII. 1993; 9頭, 静岡市上千枚沢, 20-22. VIII. 1993; 2頭, 静岡市二軒小屋, 23-25. VIII. 1993; 1頭, 静岡市上千枚沢, 5. VII. 1995; 1頭, 静岡市東俣, 11. VII. 1996.

いずれの採集地とも、ブナ帯のかなり自然度の高い二次の雑木林の中で、地上約2 mで折れた直径

20 cmほどの樹皮がほとんど剥げ落ちた立ち枯れ木に集まっているところを採集した。

7. ゼンチハナノミ

Mordellaria zenchii TOKEJI

1頭, 水窪町常光寺山, 9. VI. 1996; 1頭, 同上, 27. VI. 1991; 2頭, 静岡市上千枚沢, 30. VIII. 1993; 3頭, 同上, 5. VII. 1995.

本種も前種と同じ立枯木より得られたが、個体数は著しく少ない。アカカタハナノミも本種も花には集まらないようである。

8. アラキハナノミ

Mordellaria arakii (NAKANE et NOMURA)

2頭, 中川根町尾呂久保, 24. VII. 1981; 2頭, 静岡市牧ヶ谷, 6. VI. 1982; 1頭, 天城湯ヶ島町天城山, 26. VI. 1982; 1頭, 水窪町五丁坂頭山, 26. VII. 1987; 1頭, 同上, 14. VII. 1989; 3頭, 水窪町常光寺山, 9. VI. 1991; 1頭, 水窪町門桁山, 29. VI. 1991.

前2種と異なり、平地からブナ帯にかけてクリやノリウツギの花上より得られるが、個体数はあまり多くない。

9. キンオビハナノミ

Variimorda flavimana (MARSEUL)

1♂, 水窪町アカクボ沢, 10. VII. 1988; 1♀, 静岡市閑蔵, 2. VII. 1997.

2例とも、偶然下草上に静止中の個体を得た。

10. ホソクロハナノミ

Mordellaria niveoscutellata NAKANE et NOMURA

1頭, 静岡市谷沢, 19. VII. 1977; 4頭, 焼津市野秋, 24. VI. 1985; 10頭, 同上, 25. VI. 1996; 1頭, 島田市柳島, 30. V. 1997; 1頭, 金谷町志登呂, 1. VII. 1997; 1頭, 本川根町長島, 15. VII. 1999.

本州での採集例は紀伊半島の一部と静岡県に限られている。静岡市谷沢ではタケニグサ、焼津市野秋ではアカメガシワの花上より得た。とくに野秋では個体数も多い。また、本川根町長島では土場に飛来した個体を得ている。本種は、小楯板が銀白色のため、他の類似種と一目で区別できる。

(静岡県焼津市, 杉本可能)

○キノホソチビマルハナノミ(新称)の木曾駒ヶ岳での記録

キノホソチビマルハナノミ(新称) *Cyphon san-*

noides YOSHITOMI は木曾御岳周辺と乗鞍岳周辺からのみ採集されている亜高山帯に生息するマルハナノミで、生息地での個体数はかなり多いものの分布域は限定されていると考えられる。最近、筆者の標本を整理したところ、木曾駒ヶ岳で採集された本種の標本を見いだした。これまで木曾谷の西方でのみ記録されており東方からの記録はなかったので記録する。

1♀, 長野県木曾郡木曾福島町木曾駒ヶ岳(標高約1,400 m付近), 4. VII. 1993, 吉富博之採集。

(愛媛大学農学部昆虫学研究室, 吉富博之)

クロヘリメツブテントウの越冬場所について

平井剛夫・平井克男

筆者らは、1993年3月27日に樹皮下で越冬する甲虫類を採集するため立ち寄った静岡市の林内で3ミリ程の小型のテントウムシを10数頭を得た。大桃定洋氏にこの標本をお見せしたところ、珍しいとされるメツブテントウの仲間であることを教示された。手許の図鑑でみるとクロヘリメツブテントウ *Sticholotis hilleri* WEISE であり、分布は本州で、希な種である(佐々治, 1985)と示されている。佐々治(1998)は「テントウムシの自然史」でメツブテントウ族を概説して、「南方の温暖地域から熱帯地域に行く」と個体数も種数もふえるが、日本では3属10種を産するのみである。体長は1.4~3.3 mm. カイガラムシ類・アブラムシ類捕食の例が報告されているが、生活史はほとんどわかっておらず、越冬中のものが樹皮下から採集されている」と著している。越冬については、ムツボシテントウについてだけであって、その他のメツブテントウについては何も記されていない。

2000年3月23日に筆者らはこの地に再び訪れ

る機会があったので、林内にある本種の越冬場所としての樹種や越冬環境を調べてみた。ここに今回の調査や観察例をおして得た知見を報告するとともに、いくつかの考察を試みてみた。

クロヘリメツブテントウを採集した場所は、静岡市夜打島で、安倍川の支流である藁科川沿いである(写真1)。越冬個体は林内にあるイチイガシの樹皮下から得られた。林内には胸高直径で約80 cmが1本、40~50 cmが2本の計3本のイチイガシを確認できた。今回この場所のイチイガシから得られたクロヘリメツブテントウの個体数は計184頭であった。林内には、スギ、モウソウチク、ケヤキ、イチイガシなどの樹種があるが、クロヘリメツブテントウの越冬場所として確認されたのはイチイガシだけである。

越冬個体が得られたイチイガシのはがれやすくなっている樹皮は林床から下枝までの約5~10 mの間の樹幹についているが、本種の得られた範囲はおよそ胸高から地際の間であって、地際付近に多くの個体を見つけた(写真2)。さらに本種が得られた樹皮はイチイガシのある特定の方位に限定されているようであり、いずれも道路側の南の方角に向いていた。樹皮が乾燥気味のところからは見つけられず、得られたもののほとんどが湿り気の認められた側からであった。越冬部位には太陽光が直接には入り込まないようであるので、林内を吹き抜ける風の方向が樹皮下の乾燥程度と関係するのだろうか。特定の方位に限られているということは、本種が越冬場所として湿り気のある場所を好んで選択するためであろうか。

樹皮下における越冬個体はほとんどが1個体ずつであったが、数個体、ときには4, 5頭が見られた場合もある。しかし、複数個体が見られた場合



写真1. クロヘリメツブテントウの越冬のみられた場所。



写真2. クロヘリメツブテントウが越冬していたイチイガシの樹皮。



写真3. イチイガシの樹皮下でのクロヘリメツブテントウ越冬個体。

あっても個体どうしが重なり合っているようなことはなく、それぞれの個体の大きさと同じくらい、もしくはそれ以上離れていた(写真3)。本種は同じテントウでも越冬場所で多数の個体が重なる合うようにして集団越冬するナミテントウの越冬習性(谷岸, 1976)とは違うように思われる。

本種はイチイガシの樹皮下を越冬場所として利用しているということがわかったが、この樹種だけに限られたことである。同じ林内にある同じ大きさで同様にはがれやすいケヤキの樹皮をはがして調べてみたが、メツブテントウを発見できなかった。このイチイガシに限っているとすれば樹種を限定しているわけがあるのだろうか。

佐々治(1998)は前述の概説のなかで、クロヘリメツブテントウと同属のモリモトメツブテントウは、上野(1992)により多数個体が夜間樹上で活動していることが観察されたと述べているが、樹種は明らかにされてない。また、斉藤(1992)はムツボシテントウが5月29~30日東京において夜間多数の個体がケヤキの樹幹にいたことを報告している。すでに越冬を終えて活動時期に入っているものと思われるが、興味深いことはほとんどの個体が根際から地上1m以内の所でしか見られなかったということであり、筆者らが観察したクロヘリメツブテントウの越冬場所での部位と一致している。大桃(1991)は、茨城県のテントウムシ科をまとめているが、その中でムツボシテントウを水戸市内で3月5日にケヤキの樹皮下で採集した例を報告している。さらに、筆者らが直接得た知見としては、千葉県鴨川市で8月末にクロジウニホシテントウをカシ類の枝をスライピングして得た例がある(大桃, 未発表)。メツブテントウ類の樹種との関係についてこれ以外で知り得た知見はない。

イチイガシが関東以南に生育しているということ、クロヘリメツブテントウの分布が本州に限られていることから、この樹種がこのテントウムシの特定の越冬場所と考えられないものだろうか。そのことを証明するには、少なくとも、別の場所でも同様にこのテントウムシがイチイガシの樹皮下で越冬し

ていることを確かめる必要があるだろう。それよりもっと確認しなくてはならないのは、このテントウムシの寄主としてこの樹種だけにつくカイガラムシやアブラムシ類がいるかどうかということである。すなわち、このメツブテントウの寄主を明らかにすることが必要になってくる。佐々治(1982)はメツブテントウ族の食性については常食食餌としてアブラムシ類とカイガラムシ類(硬)を示している。詳しいことは分かっていないとしながら、3種のマルカイガラムシ類を食べると古い記録があると記している。アブラムシについては寄主植物としてのイチイガシとの関係を示す知見は得られなかった。

以上、生活史が不明であるというために、クロヘリメツブテントウの越冬場所について筆者らなりの思い切った考察もおこなって見たが、今後不明な点は事例を増やして明らかにしてゆきたいと思う。

末筆ながら、イチイガシの同定とこの樹種に関する種々の情報にご協力いただいた森林総研の井上大成氏と、本種の調査を始めるきっかけをつくり未発表のデータの公表を快諾していただいた大桃定洋氏の両氏に厚くお礼申し上げたい。

引用文献

- 大桃定洋, 1991. 茨城県のテントウムシ科について, りりほし, (16): 5-14.
 斉藤琢己, 1992. ムツボシテントウに関する若干の知見. 月刊むし, (252): 40.
 佐々治寛之, 1982. テントウムシ類の食性 [I]. インセクトリウム, 19: 14-19.
 佐々治寛之, 1985. テントウムシ科・黒澤良彦ほか編, 原色日本甲虫図鑑, 3: 245-270, 保育社, 大阪.
 佐々治寛之, 1998. テントウムシの自然史, 251 pp. 東京大学出版会, 東京.
 谷岸一紀, 1976. ナミテントウの越冬. インセクトリウム, 13: 294-298.

(平井剛夫: 茨城県つくば市)
 (平井克男: 静岡県焼津市)

○埼玉県でセボシヒラタゴミムシを採集

セボシヒラタゴミムシ *Platynus impressus* (PANZER) は、埼玉県昆虫誌によると埼玉県からの記録はないようであるが、筆者は次のとおり採集しているため記録しておく。

1頭, 埼玉県大滝村豆焼橋, 22. V. 1999; 3頭, 同所, 2. X. 1999, いずれも鎌倉正人採集・保管。

採集地点は、最近開通した国道沿いの、山間の駐車場付近の側溝である。周囲はブナなどの自然林あるいは杉の植林地で、奥秩父に普通に見られる環境であった。信州などでは高地草原や河川敷で得られることが多く、本来当地に生息していたものなの

か、工事などで土砂と共に運び込まれたものなのか、筆者にはわからない。しかし、春と秋に合計で複数個体が得られていることから、当地で世代を繰り返している可能性が高い。

引用文献

- 吉越 肇ほか, 1998. 埼玉県の鞘翅目(甲虫類). 埼玉県昆虫誌 III: 93-340, 埼玉昆虫談話会, 大宮.
 豊田浩二ほか, 1999. 『埼玉県の鞘翅目(甲虫類)』に新たに追加する甲虫類. 埼玉県昆虫誌別巻: 18-28, 埼玉昆虫談話会, 大宮.

(東京都文京区, 鎌倉正人)

啞然、呆然、そして慄然

露木繁雄

2000年3月25日午後8時すぎ電話が鳴った。「はい、露木でございます」「あの、西川と申しますが、……」。私は西川姓の人を二人知っている。一人は「西川協一氏」、もう一人は海老名市に在住の「西川正明氏」だ。でもその声はどちらでもなかったもので、多分「はあ、」と曖昧な返事をしたように思う。すると電話の主は「父の西川協一が今朝亡くなりましたので、お知らせします」と告げたのだ。一瞬、この人は何をいっているのだろうかと思った。というのも、協一さんとは前日の金曜日の午後6時頃まで一緒に仕事をしていて、「じゃあ、また来週の火曜日に……」と別れたばかりだったのだ。まさに「耳を疑う」とはこのことか。私の頭のなかは瞬時に『交通事故』『山での事故』かなどの思いがよぎった。あまりにも唐突であったため、もし本当に亡くなられたとしたら、事故しか思い浮かばなかったからだ。ところが「今朝トイレでクモ膜下出血で倒れまして……」と聞かされ、啞然とした。前の日までまったくなんの前兆もなく、しごく元気であったので、とても信じられなかったからだ。しばし呆然としていた。

西川協一さんとの出会いは1953年(昭和28年)に、私が高校に入学し、「生物学研究会」というクラブに入ったとき、彼が一年先輩としてそこにいたのである。そして、すでに彼は当時「少年昆虫同好会」(後に「東京昆虫同好会」と合併して化け物同好会といわれた「京浜昆虫同好会」に発展させた)を主宰していて、私も当然のごとく入会して本格的な虫屋としてのスタートを切ったわけで、わたしの人生の道を狂わせた一人であったことは間違いない。

西川さんは男ばかりの4人兄弟の長男で、こういった家庭環境の人はよく似た性質なのか、私の知っている3人の方とも、若いころに何らかの会を創設していた。1960年ごろに西川さんが始めた私的な虫屋の集まりである「木曜サロン」はいままでに続いている。このように彼は新しいことを始めるこ



ハヶ岳山麓にて(1999年5月29日)京浜OB会, 右。

と、それを運営することが好きで、また人を使うのがとても上手であった。

「虫屋」としてはともかく「虫屋」を育てたり、虫屋の世界をうまくコーディネートして、日本のアマチュア虫屋界の発展に大いに貢献したことは確かだ。近年は虫の世界ばかりでなく、鳥や植物をはじめとして、あらゆる自然物に興味を持ってよく勉強されており、いわゆるナチュラルリストの道を目指していたように見受けられた。ご自分の知識向上だけでなく、それを活かした事業をしてみたいと漏らしていたが、志半ばにして他界されてしまった。本人ももちろん残念だったと思うが、われわれ虫屋仲間の中にもほんとうに残念な思いでいっぱいだ。

あまりにも早すぎた西川さん死去の知らせは、私の心を慄然たる思いで満たした。協一マウスはこの世から去ってしまった。まことに淋しいことである。ご冥福をお祈りする。(神奈川県逗子市)

京浜の西川

木村欣二

電話のベルが鳴る。

「京浜の西川です。どうもどうも、お元気ですか。」語尾にアクセントのある西川節で、早口に喋った後、「ところでさあ……」、急にくだけた調子になる。

あの声も、もう聞く事ができない。

用件とは言えば、山へ行こうとか、マージャンしようとか、標本を貸せとか、一杯飲もうとか……。同い年とあって、お互いに遠慮がなかった。しかし、誘いをかけて来るのは、いつも彼の方だった。常に彼の方が兄貴だった。そして彼からは何か大事な事を教えられ続けて来たような気がする。細かな心遣いだとか、全力で生きる事だとか、開拓者精神だとか。

一緒にオサムシの調査をやった頃、彼はそれこそ先頭に立って走った。一通り判って来ると、打って変って不熱心になった。彼の自然観はごく素朴で、謙虚だったのだろう。自然の入口に立って目を見張るのが、好きだったのだろう。心はずっと少年だった。彼が、定年も近くなってから、鳥や植物の勉強をはじめたのも、自分のコレクションを作らなかつたのも、京浜昆虫同好会復活の話が持ち上がった時、京浜の西川である彼が何となく乗気でないように見受けられたのも、彼が情熱を注いだ頃の自然と現在のそれとのギャップが寂しかったのではないかと今にして思う。

別れの花を手向けた彼の穏やかな死顔には、やはり前歯が見えていた。虫達を恐怖させた京浜の猛者連も涙を隠せなかった。我々は、西川と共に、自分達皆がかつて持っていた「昆虫少年の時代」をも葬ってしまったのではないだろうか。

(東京都大田区)

○与那国島におけるチビクテプトゾウムシの採集例
チビクテプトゾウムシ *Tivicis maculatus* MORIMOTO は1983年、石垣島および西表島産の標本にもとづいて記載された種で、小島(1991)は沖縄本島からの追加記録を報じた。筆者は新産地である
与那国島産の標本を保持しているため報告する。

1頭、与那国島比川林道、26~31.III.1997、筆者採集。

末筆ながら、採集に同行して下さった石川忠氏にお礼申し上げます。

参考文献

MORIMOTO, K., 1983. The family Curculionidae of Japan. II. Viticinae, subfam. nov. *Esakia, Fukuoka*, (20): 55-62.

小島弘昭, 1991. チビクテプトゾウムシ亜科2種の記録. 甲虫ニュース, (93): 6.

(九州大学, 吉武 啓)

○都区内で灯火に飛来したラミーカミキリ

ラミーカミキリは、見るからに南方系の種で、温暖化に伴って北へと分布を拡大して、東京都では高尾山や奥多摩方面で分布が確認されているようだが、23区内での記録はまだないと思われる。

筆者は、自宅付近で灯火に飛来した本種を採集したので、記録しておく。

1♂, 大田区鶴の木, 21.V.1999, 木村欣二採集。

採集したのは、多摩川の堤防の際で、付近にカラムシの生えている所もあるが、念のため探索を試みた範囲では、他に発見できなかった。

(東京都大田区, 木村欣二)

◇第23回名古屋支部会の報告◇

第23回名古屋支部会は平成12年3月20日1時より、名古屋女子大学大学院棟にて開催された。自己紹介を兼ねた参加者の一人一話の後、吉富博之氏による「日本のマルハナノミ科について」、佐藤正孝氏による「愛知県のレッドデータブックについて」の講演が行われた。

講演終了後は、有志により近くのアナゴ料理屋で懇親会が開かれたが、懇親会終了後も談義が続き、再び名古屋女子大にもどり、夜がふけるまで甲虫談義に花を咲かせていた参加者も少なくなかった。

なお支部会の世話は、これまで長年にわたり穂積名古屋支部長がいっさいを引き受けてこられたが、穂積支部長の負担の軽減のため、今後長谷川が会の開催の世話などを引き受けることとなった。会場では、穂積支部長のこれまでの労をねぎらい、感謝の意味をこめた記念事業を興すことが提案された。

開催にあたり、色々と便宜をはかっていただいた名古屋女子大学の佐藤正孝教授と八田耕吉教授、院生の溝口智子、駒田篤子両氏に感謝の意を述べてレポートを終わりたい。

(出席者氏名) 大塚 篤, 秋田勝己, 官能建次, 市橋

甫, 坂上光一, 豊嶋亮司, 岩崎 博, 伊沢和義, 杉村明道, 桐山 功, 豊島健太郎, 清水清市, 大澤省三, 八田耕吉, 長谷川道明, 蟹江 昇, 溝口智子, 駒田篤子, 河路掛吾, 佐藤正孝, 野平照雄, 高井泰, 穂積俊文, 小鹿 亨, 吉富博之, 金田吉高, 宇都宮泰博, 大野夏樹(以上28名, 順不同)



(名古屋支部担当, 長谷川道明)

○訂正とお詫び

本誌第124号(1998)の14頁で筆者は、オオツチハンミョウ *Meloe proscarabaeus sapporensis* Kôno について北海道と本州のみに分布すると記したが、九州大学の上野輝久氏から、本種がすでに四国から記録されている(森本 桂編, 1986. 原色日本甲虫図鑑第II-IV巻追補・正誤表)との指摘をいただいた。上記発表を訂正し筆者の軽率さをお詫び申し上げるとともに、分布記録についてご指摘を下さった上野氏のご厚情に深くお礼申し上げます。

(埼玉県浦和市, 芳賀 馨)

甲虫ニュース 第130号

発行日 2000年7月31日

発行者 大林延夫

編集者 妹尾俊男

発行所 日本鞘翅学会 〒169-0073東京都新宿区百人町3-23-1 国立科学博物館分館動物研究部昆虫第2研究室 ☎ 03-3364-2311

印刷所 (株)国際文献印刷社

年会費 6,000円(一般会員)

郵便振替口座番号 00180-3-401793

昆虫学研究器具は「志賀昆虫」へ

日本ではじめて出来たステンレス製有頭昆虫針00, 0, 1, 2, 3, 4, 5, 6号, 有頭ダブル針も出来ました。その他, 採集, 製作器具一切豊富に取り揃えております。

〒150-0002 東京都渋谷区渋谷1丁目7-6

振替 00130-4-21129

電話 (03) 3409-6401 (ムシは一番)

FAX (03) 3409-6160

(カタログ贈呈) (株)志賀昆虫普及社